

- ① 症候性認知症の予防
- ② 栄養・水分適合治療
- ③ 神経細胞変性の鑑別診断
- ④ 特効薬がない現在の環境整備
- ⑤ 若年性認知症の早期発見治療
- ⑥ 認知症サポーターの活用

① 症候性認知症の予防

症候性認知症は治りうる認知症です。

治りうる認知症は早く治したいものです。

現在、認知症を完璧に治す治療法はありません。

治りうる認知症を探し出して、早く治すことが優先されます。

② 栄養・水分適合治療

医学的治療はとても重要であるが、栄養と水分が体内に入らないと、治療に逆らって認知症状が出現し、病状がどんどん悪化してしまう。

予備力もなく、虚弱化した状態では病には勝てない。これは常識である。

入院患者の75%を65歳以上高齢者が占めている現在、虚弱状態の高齢患者に直ちに栄養と水分の適切な補正を行うべきである。

⑥ 認知症サポーターの活用

認知症サポーター数は2022年6月末時点で13,912,513人。年代別にみると10代が最も多く、次いで70代以上、そして60代以上が多い。

しかしながら、サポーターが十分に活用されていない。

60代以上の定年を過ぎた元気高齢者が、自分が積み重ねてきた貴重な経験を活かし、認知症サポーターとして活躍することで、元気高齢者自身も自分なりの「生きがい」を持つこととなり、健康を維持し続けることにつながるのではないか。

《認知症サポーターの性別・年代別構成（2022年6月末）》

